

愛媛県西南部方言語法

——語法境界の試み——

鎌 田 良 二

(一)

愛媛県西南部地方のアクセントの型について、平山輝男著「日本語音調の研究」に（図1）に示すような地図がある。

愛媛県東部とともにあわせ見れば、県下に7種の型があることになる。

このようにアクセントにおいて複雑な相をしめす愛媛県西南部は、語法の上ではどのような相を示すのだろうか。

アクセント境界と語法境界との相関関係をみるとともに、それでは、当地方の語法境界を示すためには語法の問題としてどのようなことをとりあげて考えればよいか、という点などについて考察してみたい。

当地域の語法境界をしめしたものに、「方言学講座 第3巻 一愛媛一」がある。1) 同書にしめされた境界は（図2, 3, 4, 5）である。

（図1）のアクセント地図に（図2, 3, 4, 5）を重ね、その境界がどうであるかをくらべて考えてみればよいのであるが、ここにまず語法境界の立場から（図2）以下の4図について検討してみることにする。

（図2）のダスライ、マスライについて。東宇和、西宇和郡より西は、この二語とも並存するが、県の中央部にあたる温泉、伊予両郡と、喜多郡、上浮穴郡ではマスライ、またはマサイをつかうが、ダスライは使わないことになっている。

ダスライとマスライとは、上接語が体言か用言かの違いによるものであ

1) ほかに、日本方言研究会編「日本の方言区画」に杉山正世氏の「愛媛の方言区画」があり、語法上の境界として武智正人氏の区画を記したものがある。

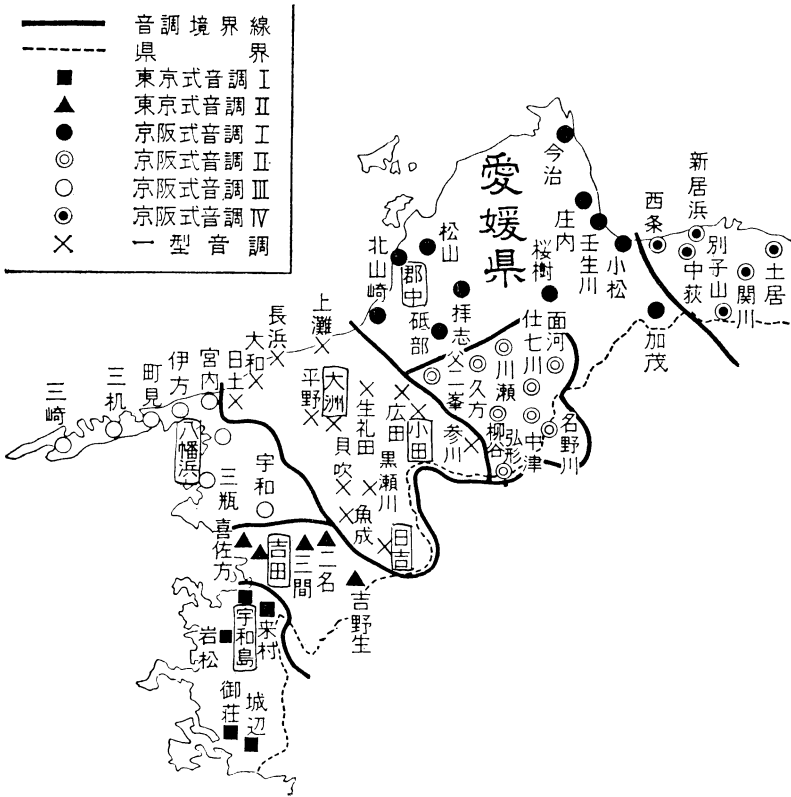


図1 (平山輝男氏作図) □印地点は本稿調査地点

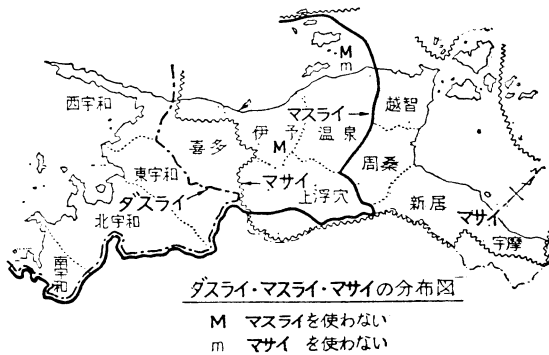
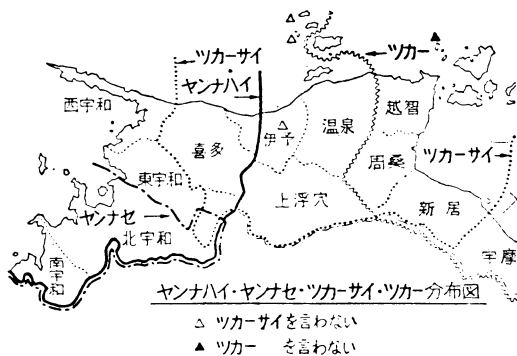


図2 (杉山正世氏作図)

図 3



(図 3～5 杉山正世氏作図)

図 4

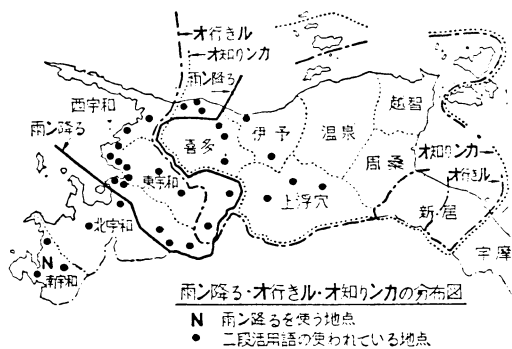
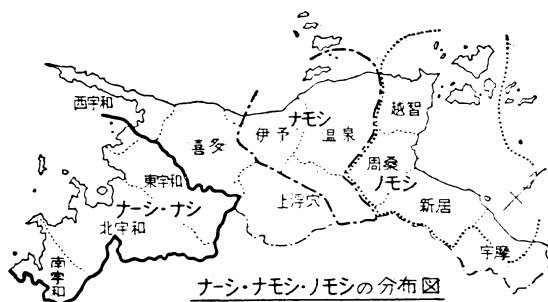


図 5



て、この二つは当然同一地域において使うものである。もし中央部の地域でマスライだけを使っているのであれば、ダスライにあたるものの代りには何を使っているのだろうか。

これについて、私は昭和41年 8 月に上浮穴郡小田町で調査したところ、デスライを使うとのことであった。

また、武智正人著「愛媛の方言」では次のようになっている。

デスライ——ですよ、そうデスライ

マスライ——ますわい、マスルワイ

お天気になりマスライ

語 \ 地点	三島	新居浜	西条	今治	北条	松山	重信	伊予市	中山	久万	小田町	長浜	大洲	内子
デ ス ラ イ								○	○		○	○	○	○
マ ス ラ イ					○	○	○	○	○	○	○		○	○

語 \ 地点	肱川	八幡浜	三崎	三瓶	宇和町	明浜	野村	黒瀬川	鬼北	宇和島	津島	日振島	城辺
デ ス ラ イ	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○
マ ス ラ イ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

同書にはダスライはでていない。(図 2) のダスライの地域も上記のようにデスライになっている。

即ち、ダスライとデスライとは語法上同じものであり、これは **de** と **da** という音韻の違いによるものである。

(武智氏の書では、県下45地点についての調査結果を記してあるが、ここに引用した地点より東はデスライ、マスライとも使わない。)

さらに、武智氏の同書によれば、ライは、「向うから来よライ」のようにして用い、県下45地点の中、使わない地が 7 地点(広島県に近い瀬戸内の島々のみ)である。

県下全域にこのライがあり、その上にデス、マスがついたものであり、こ

の中のデスがダスになるか、ならないかを示すものということになる。

武智氏の調査とあわせ考えれば(図2)の、マスライを使用する地域、全域に、デスライ、ダスライがあると解釈してよいであろう。

デスライ、ダスライとマスライを使うかどうかということは語法上の問題として大切なことであるが、マスライの線が中央部よりも東寄りであり、そして(図2)のダスライの線を上記の理由により、ダスライ、デスライの線としてマスライの線に一致させるのであるなら、本稿の西南部語法としては全域にマスライ、ダスライ(デスライ)が存在するものと考え、当地の語法境界としては使えない。

次に(図3)のヤンナハイ、ヤンナセの境界について考察する。

この二語は、ヤンナ+ハイ、ヤンナ+セであるから、ハイとセとの違いになる。

このセは、ヤンナセーのようにセーともなるもので、サイから、サイ→セー→セと変化したものとみることができよう。

それならば、結局、ハイとサイとの違い、即ち、 $S-h$ の比較である。

それで、もし、県下のこの地域で、ほかに $S > h$ という音韻変化があるならば、これは当地一般の音韻変化ということになる。

武智氏の書で、ソヤ(そうだ) — (同書 p. 168) は県下45地点の中、10地点にあるのみで少なく、同じような意味をあらわす「そうだから」の意のホヤケンは26地点にある。即ち一般にS音がh音になる傾向が強いということを示すものである。

だから、これは語法上としてよりもむしろ音韻上の問題であり、先と同じように語法上からは、ヤンナハイまたはヤンナセを使う地域として一括してよいだろう。

また、同図に、ツカーサイの境界線がある。

ツカーサイとヤンナハイとはともに「下さい」の意であるが、ツカーサイは「遣わしなさい」からでた語であろう、ヤンナハイはヤリナサイで、実は第三者に対してヤリナサイということをして「私にヤリナサイ」として使い、そ

れで「下さい」の意になったもの考える。

それでは、ツカーサイを使うか、ヤンナハイ（ヤンナセ）を使うか、ということは、語法よりもむしろ語彙、または、表現法の問題であろう。

以上により、（図2，3）は当地の語法境界について考察するには一応除外する。

純粹に語法の境界として大切なのは（図4）である。

即ち、当地の語法上の事実をとらえた図である。

オ行キルという敬語表現、「オ（連用形）ル」の形で表わす敬語。同様に、オ知リンカ。

また、雨ン降る、は格助詞の融合、省略の問題として。

そして、二段活用の問題も重要である。

（図5）のナモシとノモシは音韻上の違いであるが、ナモシという終助詞があることによって文形式に影響を与えるものであるから、これも語法上の問題とする。

以上によって、アクセントを示した（図1）と（図4，5）との重ね合わせにより語法境界として調査すべき地点を次のようにきめ、昭和41年8月に臨地調査した。

調査地点は次の通りである。

伊予市、大洲市、八幡浜市、上浮穴郡小田町、喜多郡河辺村、北宇和郡吉田町、広見町、日吉村、宇和島市。

（図1）の中に、地名を□でつつんだ地点である。（図1）の中で、「郡中」とある地が、現在は市制が施かれて「伊予市」となった。

北宇和郡広見町は（図1）の「吉田」の東「三間」とした地点のすぐ南にあたる。

喜多郡河辺村は「小田」から峰を一つ越えた西南にあたり（図1）の「黒瀬川」の北東である。

(二)

今回の調査では、単に音韻上の語形変化とか、語彙の問題と考えられるものを除き、純粹に語法として重要な事項であり、愛媛県下に存在すると思われる9項目につき上記9地点で調べた。

本稿では、さらに武智正人著「愛媛の方言」から6項目を引用して、計15項目により語法境界を試みる。

(1) 次のような語は一段活用か五段活用か

- (例) 飽 き る——ア ク
借 り る——カ ル
足 り る——タ ル

9地点とも、この語は五段に活用させる。

(2) 動詞二段活用の有無

- (例) 起 き る——オ ク ル

調査では、大洲市にだけあった。(これは先の(図4)に記されているが今回の調査結果を重んじることにする)

(3) 動詞ナ行変格活用の有無

- (例) 死 ん ぬ(連体形)——シ ヌ ル
去 ん ぬ(ッ)——イ ヌ ル

9地点とも、シヌル、イヌルの形がある。

(4) いわゆる略音便形があるか

- (例) 食 っ た——ク タ
誘 っ た——サ ソ タ

調査では、「誘う、歌う、笑う」などの語幹が二音節になる語と、「食う」の語幹一音節語とについて調べた。

伊予市、八幡浜市、小田町、日吉村では4語とも「サソタ、ウトタ、ワロタ、クタ」という略音便の形になる。

次の地点では、左側に記したものは略音便になり、右側に記した語はなら

ない。

	略 音 便 に な る	略音便にならない
広 見 町	誘 う, 歌 う, 笑 う	食 う
大 洲 市	歌 う, 笑 う	誘 う, 食 う
河 辺 村	誘 う	歌 う, 笑 う, 食 う

吉田町, 宇和島市では4語とも略音便の形にはならない。

(5) サ行五段活用動詞にイ音便形があるか

(例) 傘さして——サ イ テ

伊予市にのみサ行イ音便形があり, 他の地点では, サイテも, サエテも, このような形になるものはない。

(6) 「オ(連用形)ル」の形で敬語表現になるものがあるか

(例) オ書きル オ行きル

伊予市, 大洲市, 河辺村, 小田町の4地点にあるが, これは先の(図4)の通りである。

(7) 「オ(連用形)ン」の形で打消の敬語形式があるか

(例) オ知リン

「知っていらっしゃらない」「御存知ない」の意である。

伊予市, 大洲市, 小田町にあるが, 他の地点にはない。

これも(図4)にある通りである。

(8) 指定の助動詞ダ, ジャ, ヤについて

9地点の殆どがジャであるが, 宇和島市, 広見町にダがある。

伊予市	大洲市	八幡浜市	小田町	河辺村	吉田町
ジャ	ジャ	ジャ	ジャ	ジャ	ジャ・ヤ
広見町	日吉村	宇和島市			
ジャ・ダ	ジャ	ダ・ヤ			

(9) 禁止助詞「ナ」が, 五段活用以外の動詞終止形のルが落ちたものにつく

(例) す る な——ス ナ

見 る な——ミ ナ

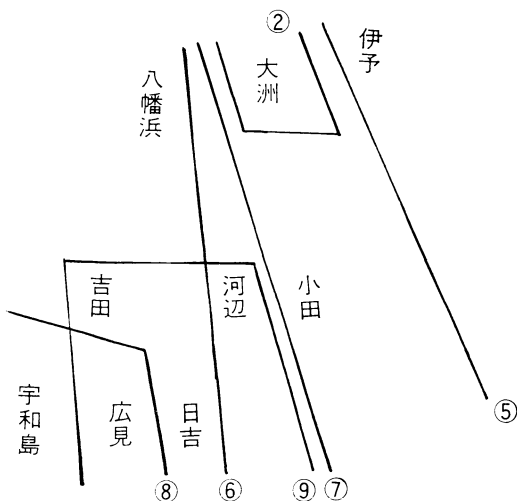
調査にあたっては、サ変、上一段、下一段、カ変の「するな、見るな、起きるな（語幹一音節語と二音節語）受けるな、来るな」について調べた。

9 地点の結果は次の通りである。5 語ともこの形になるもの○印、5 語ともならないもの×印、他はこの形になる語を記した。

伊予市	大洲市	八幡浜市	小田町	河辺村	吉田町
○	ス ナ オキナ	○	○	ミ ナ ス ナ	ス ナ
広見町	日吉村	宇和島市			
×	ス ナ ミ ナ	○			

以上(1)から(9)までの語法上の事実について、(1)(3)(4)は、この地方では境界を示さないから、他の 6 項目によって境界の線を引けば次の通りである。

図 6



武智氏の「愛媛の方言」には、語法篇として 454 項目について、県下 45 地点の使用状況をくわしく記してある。

ここに、本稿で示した 9 地点について、この書から 6 項目をとって境界を試みたいのであるが、調査地点に多少の違いがある。

河辺村を同書では、肱川村、河辺村を一つにして「肱川」としてある。

吉田町は同書には記していない。

本稿では広見町と日吉村とを分けて記したが同書では「鬼北」としている。よって、伊予・大洲・八幡浜・小田町・肱川・鬼比・宇和島について記す。

同書からとった 6 項目は、先に述べたように純粋に語法の問題として重要と考えられるもの、さらに、この 7 地点で境界の線を示し得るものの二点から考えたものである。

(10) 「オ（連用形）マス」——内にオいでマスか？

(11) ザッタ（なかった）——知らザッタ

否定の助動詞をズ・ザルの系統の語をつかう。

(12) ゾカ（だろうか）——皆行くゾカ、皆行くゾーカ

ゾカが何ものかは不明だが、ジャロとか、ジャ系からのものであるうか。

(13) 「コソ——仮定形」——いやでコソアレ、好きでコソあッタレ

(14) 助詞ハの消滅——これ○面白い、酒○ない

以上 5 項目について、武智氏の書から 7 地点の使用状況を示すと次の通りである。

	伊 予	大 洲	八 幡 浜	小 田 町	肱 川	鬼 北	宇 和 島
10		○		○			
11	○		○			○	
12			○			○	
13			○				○
14	○		○	○		○	○

左の表と、（図 6）との関係から、次のようなことが言えよう。

- (a) 伊予市は、他の地点と区別する。1)
- (b) 大洲市と小田町とは一群とする。
- (c) 八幡浜市と鬼北（日吉村・広見町）を一群とする。
- (d) 宇和島市は、他の地点と区別する。

る。

(e) 肱川（河辺村）は一応、小田町とは切離し、入れるなら八幡浜市、鬼北の群に入れる。

1) 本稿の(三)の項参照

なお、大洲市と八幡浜市とは距離ははごく近いが、方言語法の上では明らかな相違を示している。

(a)(b)(d)は前記の(図1)に示したアクセント境界と一致する。

(三)

上記9地点について文例調査した結果を示す。

文例は、榎垣実編「近畿方言の総合的研究」の(附録2)からとった。

当地はアクセントの相が複雑な地域であるから、当然アクセントを附すべきであろうが、本稿は特に語法の境界を示すものであるから、アクセントは省いて、語法上の特徴があらわれている部分に~~~~線を、語法以外の特徴があらわれている部分に——線をそれぞれの語の下に記した。

1. 雨が降っているから 傘をさして行きなさいよ。

伊予市	アメガ	フリヨル <u>カラ</u>	カサオサシテオイキーナ
大洲市	アメガ	フリヨル <u>ケン</u>	カササシテイキナハイヤ
八幡浜市	アメガ	フリヨル <u>カラ</u>	カササシテイキナハイヨ
小田町	アメガ	フリヨル <u>ケン</u>	カササシテオイキヨ
河辺村	アメガ	フリヨル <u>ケン</u>	カササシテイケヨ
吉田町	アメン	フットル <u>ケン</u>	カササシテイキサイヨ
広見町	アメガ	フリヨル <u>ケン</u>	カササシテイケヤ
日吉村	アメガ	フッ <u>ッ</u> ョル <u>ケン</u>	カサオサシテイキナイヨ
宇和島市	アメガ	フッ <u>ッ</u> イル <u>ケン</u>	カサオサシテイキサイヤ

2. そうだ そうだ そのほうが よいだろうな。

伊予市	<u>ホー</u> ヨ	ホーヨ	ソノホーガ	エー <u>ジャ</u> ロナァ
大洲市	ソーヨ	ソーヨ	ソノホーガ	エカローナァ
八幡浜市	<u>ソー</u> ジャ	ソージャ	ソノホーガ	イイ <u>ジャ</u> ローナァ

小田町 ホーヨ ホーヨ ソノホーガ エエゾヨ
 河辺村 ソー ソー ソノホーガ エーゾ
 吉田町 ソーヨ ソーヨ ソノホーガ エーヤロナァ
 広見町 ソーヨ ソーヨ ソノホーガ イイワイ
 日吉村 ソーソォ ソノホーガ イイジャロ
 宇和島市 ソー ソー ソノホーガ エエヤロナァ

3. こんな天気では そとへ出たくても出られんじゃないか。

伊予市 コンナテンキジャア ソトエデトーテモデラレンジャナイカ
 大洲市 コガイナテンキジャッタラ ソトエデトーテモデラレンノー
 八幡浜市 コンナテンキジャア ソトエデトーテモデラレンジャネエカ
 小田町 コガエナテンキデワ ソトエデトオテモデレンゾヨォ
 河辺村 コガエナテンキデワ ソトエデトーテモデラレンナァ
 吉田町 コンナテンキジャ ソトエデトーテモデラレジャセンジャナイ
 カ
 広見町 コガイナテンキジャッタラ ソトエデチモデレンヤナイカ
 日吉村 コンナテンキデワ ソトエデトーチモデラレンジャロ
 宇和島市 コンナテンキデワ ソトエデトーテモデラレンヤナイカ

4. 焼鳥を食って 酒をのんで 半日遊んでしまったそうだ。

伊予市 ヤキトリオクーテ サケオノンデ ハンニチアソンデシモータ
 ソーダ
 大洲市 ヤキトリオクーテ サケオノンデ ハンニチアソンデシモタト
 八幡浜市 ヤキトリオクーテ サケノンデ ハンニチアソンデシモタソ
 ージャ
 小田町 ヤキトリオクーテ サケノンデ ハンニチアソンデシモータ
 トオ

河 辺 村	ヤキトリオク ^テ <u>サケオノ</u> ンデ <u>ハンヤクア</u> ソ ^ン デシモータ ナァ
吉 田 町	ヤキトリタベテ サケ ^ノ ンデ ハンニチアソ ^ン デシモタトー
広 見 町	ヤキトリオタベ ^チ <u>サケオノ</u> ン ^ジ ハンニチアソ ^ン デシマッタ ソーダ
日 吉 村	ヤキトリオク ^チ <u>サケオノ</u> ンデ ハンニチアソ ^ン デシモータ ソーナ
宇和島市	ヤキトリオタベテ サケ ^オ ノ ^ン デ ハンニチアソ ^ン デシモータ ソーダ

5. それはそうでございましょうけれど

もう一度考えてみて下さいませんか。

伊 予 市	ソリャーソーデシ ^{ョー} ケド モーイチドカンガエテミテモラエマセンデシ ^{ョー} カ
大 洲 市	ソレワソーデシ ^{ョー} ガ モーイチドカンガエテモラエンデシ ^{ョー} カ
八幡浜市	ソレワソー ^{ジャロ} ケ ^{ンド} モーイチドカンガエテミテクレンカナ
小 田 町	ソラァーソー ^{ジャロ} ケ ^{ンド} モーイチドカンガエテミテヤァ
河 辺 村	ソレワソー ^{ジャロ} ケ ^ド モーイッペンカンガエナオシテミテワドーカ
吉 田 町	ソリャソー ^{ジャケ} ン ^ド モーイッペンカンガエテミテ ^{ヤンナハラン} カ
広 見 町	ソレワソー ^{ヤケ} ン ^ド ソガイユータ ^チ モーイッペンカンガエ ^チ ミ ^チ クレンカ
日 吉 村	ソレワソー ^{ジャロ} ケ ^{ンド} モーイチドカンガエテミ ^{チャン} ナンカ
宇和島市	ソレワソーデシ ^{ョー} ケン ^ド モーイッペンカンガエテミテクダサイマセンデシ ^{ョー} カ

小田町	アガイニヒドイアメ <u>ギリガ</u> フリヨッタケン ホ <u>ジャケン</u> イケナンダンヨ
河辺村	アメガフットタロー ソエ <u>ジャケン</u> イケナン <u>ダダ</u> ヨ
吉田町	ガイニアメフットタヤロ ソンデヨーイカナン <u>ダダ</u> ヨ
広見町	アガイニガイニアメバカリフッテイタロー ソーヤケンイカンカッタンヨ
日吉村	ガイニアメバカリフ <u>ッチョ</u> ツッロー ソン <u>ジャケン</u> イケンカッタンヨ
宇和島市	アンナニヒドイアメバカリフッテイタヤロー ソン <u>ヤケン</u> ユケナカッタンヨ

8. 考えていたって よい考えも出ないな

一度見に行ってきたらどうだい。

伊予市	カンガエ <u>タテテ</u> エーカンガエモデンガナ イチドミテキタラドー <u>ジャ</u> ロカ
大洲市	カンガエ <u>ヨッタテ</u> エーカンガエワデンノ <u>ジャケン</u> イッペンミニイッテキタラドーゾ
八幡浜市	カンガエ <u>チヨッタテエ</u> イイカンガエワデンナァ イチドミニイッタラドー <u>ジャ</u>
小田町	カンガエ <u>ヨッタテ</u> エーカンガエワデンゾオ イッペンミニイテキタラドー <u>ゾ</u> ォ
河辺村	カンガエ <u>トッタテ</u> ヨイカンガエワデヤヘンゾ モーイッペンミニイッテコイヤ
吉田町	カンガエテモ エーカンガエデンナー イッペンマーミニイッテキナハイヤ
広見町	カンガエ <u>ヨッチモ</u> イイカンガエガ <u>デンガヤケン</u> イッペンミ <u>チ</u> キタラドガイナヤ
日吉村	カンガエ <u>チヨッタチ</u> イイカンガエモデマイガナァ イチドミニイ <u>チ</u> キタラドー <u>ゾ</u> ナァ

宇和島市 カンガエヨウッタテ ヨイカンガエモデナイナ
イチドミニイッテキタラドーゾ

9. 赤ん坊を寝させるのだから、静かにしていなければいけないよ。

伊 予 市 ヤァーオ ネサセルンジャケン シズカニシトラニヤイカンヨ
大 洲 市 ヤヤオ ネサスケン シズカニシトカニヤイケンゼ
八幡浜市 アカンボー ネサセルノダカラ シズカニシトラニヤイカンゾ
小 田 町 ヤヤオ ネセオンノヤケン シズカニセニヤイケンヨ
河 辺 村 アカチャンオ ネサシトンダカラ シズカニセントイケンゾ
吉 田 町 アカチャン ネサセルケン シズカニシトカニヤイケンデェ
広 見 町 アカチャン ネカセルンヤケン シズカニセントイケンデェ
日 吉 村 アカンボーオ ネサシヨルンジャケン
シズカニシチヨキャニヤイケンド
宇和島市 アカンボーオ ネサセルンヤケン
シズカニシトカントイケンゾ

10. 去年もらった白犬の子がもうこんなに大きくなったのだよ。

伊 予 市 キョネン モロタシロイヌノコガ モーコナイニフトッタンヨ
大 洲 市 キョネン モロータシロイヌノコガ
ハヤコガイニオオキュニナッタンゼ
八幡浜市 キョネン モロータシロイヌノコガ
モーコンナニオオキクナッタガヨ
小 田 町 キョネン モロタシロイヌノコガ
モーコガイニオオキニナッタンヨ
河 辺 村 キョネン モロータシロイヌノコガ
モーコガイニオオキュウナッタゾ
吉 田 町 キョネン シロイヌノコモラッタヤロ
ハヤコンナニオーキュウナッタノヨ

広見町 キョネン モロタシロイヌノコガ

モーコガイニオーキナッタデ

日吉村 キョネン モロータシロイヌノコガ

モーコガイニオーキューニナッタンダゾ

宇和島市 キョネン モロタシロイヌノコガ

モーコガイニオーキナッタゾ

文例調査は30才～50才の男子についてのものであるが、吉田町は52才の女子のものである。

語法調査でありながら、待遇表現その他いろいろと異同があって調査結果としては好ましくない点もあるが、9地点を同年令の、ほぼ同経歴の人について、同環境のもとに調査することは短期間の調査では非常に難しいことであった。

用語上のことも、もっと是正できたかと思うが、今回のようにあらかじめ目標とした語法上の事実（例えば、二段に活用するかどうかなど）があらわれるか否かについて調べる場合、大きくさしつかえがないものは、そのままにしておいた。

文例調査中の~~~~線、——線部について、略述する。

格助詞の融合省略について見れば(1)の「雨が」の場合は、各地とも「が」がはっきりあらわれ、ただ、吉田町で「ン」となる形があるだけである。

これに対して、「傘を」の場合は、「を」が消えることが多い。

「——だから」の意をあらわすには当地としては「ケン」が普通だろう。

「傘さして」がサ行イ音便になるか、どうかについては先に述べたが、文例調査ではあらわれず、各地とも「サシテ」であった。

個別に、「サイテ」の形があるか、どうかについてたずねた場合には「ある」と答えても、このような形で文例として調査した場合にあらわれないのは、イ音便の形が当地全般として弱いということが言えよう。

したがって、先の(㊦)の項の後にあげた境界線(図6)の⑤の線は弱く、語

法上からは伊予市と小田町とは比較的近いと考えられる。ただし、伊予市と大洲市との間には境界をひくべきであろう。

指定の助動詞で「ジャ」「ヤ」「ダ」の問題も「ジャロ」「ヤロ」「ジャッタラ」「ヤッタラ」の形であらわれているが、相当出入りがあるようだ。

——線部は音韻の問題になるが、(2)の「ソー」が「ホー」となる、S—hの変化は先にも述べたが、各地に見られる。ただ「ソノホーガ」となるときは「ホノホーガ」とはならないのは、次に「ホーガ」というh音がある為に、それと区別する意味で、「ソノ」の形のままであるのだろうか。S音からh音になることが弱いことを物語るものであろう。

これに対して、広見町、日吉村で、助詞「て」が「チ」となることは(3)(4)の通りである。「食べて」が「タベチ」となるのであるのであるが、(3)の広見町では、「出たくても」が「デチモ」となるのは、デトーテモの意のデトーチモからデトチモの形を経てデッチモからデチモとなったものかと考えられる。

(4)の広見町で「酒をのんで」が「ノンシ」となるように、助詞「デ」は「ヂ」→「シ」になるのである、(5)の広見町も同様である。

本稿の調査に際しては愛媛大学武智正人教授の御助言をたまわり、また、同教授の著書によったことも多く、ここに厚く感謝の意を表す。

調査の各地点では、地元の小学校、中学校、高等学校の国語の先生方から、いろいろとお教えをいただいたが、なにぶん短時日の調査によるものであるから、当地域在住の方々からみれば御不審のことであろうかと思うので、お気付の点はお教えいただきたい。